

文芸

俳句

語り合ふ友も老いけり冬帽子

池田 逸子

歯切れ良き宅配人や年の暮

伊藤 敬子

病む妻の介護に暮れて十二月

伊藤 定男

一歳も古科も卒寿も囲む鍋

今関満喜子

冬の雨喪中の葉書濡れてとり

魚地 照子

立ら話短くなりぬ十二月

江森 悦子

独り身の救急サイレン寒々と

大谷 武彦

産業祭焼餅食べるなじみ店

川島 孝夫

仕来りも手抜きのおえて年用意

川島 通則

小春日や枯芝園に球技の子

桑名 大行

紅葉づるや池の畔の忠魂碑

向後 寛

孫の手紙胸に初冬の手術室

越川せつ子

赤とんぼ浮きの頭に休む羽

小松 藤男

生垣に日矢刺す袂庭落葉焚く

佐瀬 輝夫

着ぶくれて顔の小さき老婆なり

鈴木とし子

今日の日の思いも入れて根深汁

鈴木 利子

北風や固く閉ざせる養老園

玉虫 栗扇

夕園に冬至南瓜の煮ゆる音

土屋美枝子

菜と洗ふ母の笑顔や冬ぬくし

土屋 義昭

日当たりのよきに密生枇杷の花

戸村 静華

年の暮れ用なき者も足早に

西崎さち子

まっすぐに上る煙や十二月

早川 勇

短歌

嫁として名の変わるも孫にかわりなし

温き日向も何か侘びしき

越川 福子

神様が贈りくれしか吾が息子

至らぬ母に尽しくれます

田崎 尚美

幾重にも緋の色積みて西堂に

秋の夕陽は沈みゆくなり

八角 三枝

職人の鉄バツサリ槌を切り

秋空青く澄み徹りたり

鈴木まさ子

流行の皇帝グリヤ吾庭にも

空突き上げてあまた咲きぬつ

青木 秀子

釣り好きの恩師は皆と引き連れて

館山湾の穴場指差す

押尾 輝子

吹く風に尾花は穂と下げ久に来し

娘ら迎ふがにお辞儀するなり

吉岡 信子

一点の光となりて現れし

飛行機たらまら頭上過ぎゆく

西山満里子

今宵より人の位むらし新築の

窓に明りの点りぬるなり

芹川 初子

思ふことそのまますぐに口にす

若き同僚に日毎慣れゆく

島田ますみ

素足にて踏みて行きたし青苔の

盛り上りぬるその膨らみを

斉藤つね子

こうほう博物館 46

縄文の土人形

左下の写真は、二十五年ほど前、長倉の東長山野遺跡の発掘調査で出てきた、縄文時代中期(約五千年前)の土偶と呼ばれる粘土で作られた人形です。この土偶は、頭の部分しかなく、目が大きくくぼんで顔のほとんどを占め、目の上には眉毛が描かれています。また、三角に山型となった頭には、髪の毛を表すかのような点状の模様があり、まるで宇宙人のような感じです。そして不思議なことに裏側にも同じ顔が作られています。

縄文時代の土偶は、同じ時期のものでは山梨県から長野県で多く出土しますが、なぜか関東地方では少なく、後期になって多くなります。土偶の多くは女性をかたどっていて、乳房がついていたり、お尻が大きく表現されていたり、中にはお腹が大きく妊娠している姿を現したのものもあります。そのようなことと出土分布とを重ね

合わせて考えてみると、農業生産の豊作祈願と関係するのではないかと推定する学者もいます。そのため、縄文時代は、海からの幸が多かったと考えられる千葉県では、あまり多く土偶が出土しないのかもしれませんが。

東長山野遺跡は発掘調査で六十軒余りの住居跡と、大量の土器や石器が出土しましたが、土偶はこの一点のみでした。貝塚は形成していませんでしたが、住居跡や貯蔵穴からは貝殻が出土し、海の恵みを多く受けていたことは確かです。そのため農業生産への比重が小さかったため、土偶が少ないのかもしれませんが。



▲東長山野遺跡から出土した土偶